令和８年１０月３０日

６年生保護者のみなさま

羽曳野市立はびきの埴生学園
校　長　東　　浩　朗

令和８年度「全国学力・学習状況調査」について

清秋の候、保護者のみなさまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素より本校の教育活動にご理解とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

さて、今年度実施いたしました、文部科学省「全国学力・学習状況調査」の分析結果について、以下のように報告させていただきますので、よろしくお願いいたします。

令和８年度「全国学力・学習状況調査」分析結果

１．はじめに

全国の６年生を対象とした「全国学力・学習状況調査」が実施されました。今年度は４月２３日に国語・算数が実施されました。この調査結果を分析することで、本校児童の実態や課題を明確にし、学力向上のための学習指導の改善に活かしていきたいと考えております。

既に配布しました個人結果とあわせてご覧いただき、ご家庭でも本調査の結果についてお話していただきますよう、よろしくお願いいたします。

※今回お知らせする結果は、学力や学習状況の一部分であり、子どもたちの学力や学習状況、学校の教育活動などのすべてを表すものではありません。

２．結果の分析と今後の課題

（１)国語

【成果】

児童には問題に真面目に取り組む姿勢があり、視覚的資料が豊富でルールや条件が明快な設問では確かな力を発揮している。例えば、大問 1(1)の構成メモの読み取りにおける正答率は 53.3%で無解答率は 2.2%と極めて低く、大問 1(2)の動画の工夫に関する問題での正答率は 53.3%で無解答率は 0%だった。また、大問 1(3)の画面レイアウトの工夫に関する問題では正答率 60.0%となり、全国平均と同水準の結果であった。指示や条件、選択肢が明確な短文・図表問題では無解答率も低く、最後まで意欲的に取り組めている様子がうかがえる。

【課題】

観点別分析においては、知識・技能が 53%（全国平均 62%)、思考・判断・表現（読

むこと）が 53.3%（全国平均 65.9%）、思考・判断・表現（書くこと）が 32.2%（全国平均 45.7%）となり、特に記述問題において全国平均との差が開く結果となった。具体的には、大問 3(3)①の必要情報を検索する問題における正答率が 66.7%（全国平均 80.0%）、無解答率が 11.1%（全国平均 3.3%）となったほか、大問 3(3)②の経験と結び付ける条件記述問題では正答率が 64.4%（全国平均 76.4%）、無解答率が 22.2%（全国平均 15.6%）となった。さらに、大問 3 の文章の特徴や語句の整理に関する各問題でも無解答率が 11.1%となっており、1,000 字を超える長文や条件の多い記述に直面した際、途中で捉えきれなくなってしまう傾向が見られる。

【課題克服のために】

記述問題を前に気後れすることなく、完璧な文章をめざさなくても本文や資料にある言葉や要素を活用し、自分なりの考えを１文でも書き残す指導を行う。「～だから。」といった文末の型を提示し、自分の考えを言葉にして提出する習慣を育む。また、長文全体を頭から精読して難しさを感じるのを防ぐため、問いに必要な条件やキーワードを短時間で本文から探してマークする練習を帯時間等に取り入れることをめざす。さらに、漢字や語彙問題において教員がすぐに答えを教えるのではなく、ドリルの自動採点機能等を活用し、児童自身で間違いに気づいて解き直すプロセスを全学年で日常化していく。

（２）算数

【成果】

手順や計算ルールが指定された問題では、高い集中力を発揮している。例えば、カードを使って小数を作る大問 3(1)では正答率 97.9%（全国平均 94.5%、差+3.4pt）を記録し、大問 2(3)の単位量あたりの大きさに関する問題でも正答率 45.8%（全国平均 36.1%、差+9.7pt）と、全国平均を上回る成果を収めた。また、大問 1(2)の直方体の展開面に関する問題でも正答率 63.0%となり、全国平均の 61.8%を上回った。教員の指示を確認しながら丁寧に取り組む姿勢が確かな土台となっている。

【課題】

観点別分析では、数と計算の正答率が 54.9%（全国平均 61.1%）、変化と関係が 37.5%（全国平均 41.1%）となった一方で、図形・測定が 43.8%（全国平均 55.3%、差-11.5pt）、データの活用が 41.1%（全国平均 48.6%）となり課題が見られた。つまずきの要因としては、大問 4(3)の二重クロス表の読取における正答率 12.5%（全国平均 17.9%）に代表される複合データでの情報の整理不足、大問 2(2)や(4)の割合問題に代表される「1（もとになる量）」を視覚的にイメージして立式する力の不足、大問 1(1)の立方体の体積における正答率 52.1%（全国平均 72.7%）に代表される公式の混同が挙げられます。また、大問 1(4)の送料の求め方や大問 4(4)の帯グラフ読取など、テスト後半の問題で無解答率が上昇する傾向が窺える。

【課題克服のために】

発達段階に応じた思考ツール（クラゲチャートやＹチャート等）を低学年から高学年まで体系的に位置づけ、授業の中で情報を分類・整理する体験を重ねていく。これにより、情報量の多い文章題や複合データに接した際にも自力で段階的に情報を可視化し、整理して解き進める力を高める。また、低学年でのおはじき操作から高学年でのテープ図・線分図の活用に至るまで、もとになる「1」を視覚的に捉えさせる指導を行う。間違えた問題についても教員がすぐ答えを教えず、自力で解き直して自己採点させる習慣を定着させていく。

３．児童質問紙より

教員の丁寧な関わりや日常的な見守り、ならびにICT活用の定着により、意識面で優れた成果が出ている。「先生は自分のよいところを認めてくれている」と答えた児童が80.4%（全国平均53.4%）、「分かるまで教えてくれている」が60.9%（全国平均49.0%）、「大人に相談できる」が63.0%（全国平均33.9%）となり、教員との強い信頼関係と学校生活における安心感が育まれていることが分かる。また、「話し合い活動で考えが深まる」が56.5%（全国平均43.5%）、「自分とは違う考えについて考えるのが楽しい」が39.1%（全国平均31.9%）、「主体的に取り組む」が41.3%（全国平均29.5%）となり、対話的な学びの姿勢も定着してきている。さらに、「分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげている」と答えた児童が45.7%（全国平均31.4%、+14.3pt）にのぼり、これまでの丁寧な振り返り指導の積み重ねにより、自らの学びを見直す自律的な意識がしっかりと定着している。加えて、5年生までに受けた授業でのICT機器使用が56.5%（全国平均20.5%）、「ICTで情報整理できる」が50.0%（全国平均32.8%）となり、4年時からの思考ツール導入の成果が表れている。

【課題】

回答時間については、「国語の回答時間は十分あった」と答えた割合が53.3%（全国平均33.9%）、「算数の回答時間は十分あった」が77.1%（全国平均63.8%）となり、高い数値を示している。しかし実際には、途中で解くのをやめてしまったり、十分な見直しが行われていなかったりする状況がうかがえ、自己の解答状況を客観視する力（メタ認知）の育成が課題である。また、平日の家庭学習時間で1時間以上取り組む割合が27.0%（全国平均49.9%）にとどまり、読書習慣がない児童が60.9%（全国平均45.8%）、家にある本が25冊以下の世帯が50.0%に達するなど、家庭での学習・読書環境に課題が見られる。学校主導での言語・学習基盤の補完が不可欠な状況である。

【課題克服のために】

高い安心感を土台としながら、小テストや端末（児童採点機能等）を活用し、教員がすぐに答えを教え込まず児童自身が誤りに気づいて解き直すプロセスの日常

化をめざす。話し合い活動においては役割カードを用いて構造化を図るとともに、「～と考える。なぜなら～だからだ。」等の型にあてはめてノートに書くアウトプットを徹底し、論理的記述力へと結実させていく。また、思考ツールの系統的活用とともに、授業の終わりに「①今日理解できたこと」「②次に活かす問い」を書き残す「振り返り 2 文ルール」を低学年から系統的に取り組んでいく。テスト時には最後まで諦めずに書き残す姿勢を育てるとともに、終了前には見落としや解き残しがないかの確認をすることを徹底する。家庭学習においても、朝読書の推進や持ち帰り端末を通じた小刻みな振り返り課題の提示を行い、学校と家庭の連携を図る。

４．おわりに

今回の全国学力・学習状況調査の分析より、成果や課題が見えてきました。特に課題については、子どもたちの実態に即した取り組みを進めて行くことで、本校の「めざす子ども像」につながっていくと考えております。

これからも子どもたち一人ひとりの成長を、私たち教職員とともに見守っていただきますよう、よろしくお願いいたします。